私がなぜ現在の科目を選んだか

「第１外科」

信州大学医学部外科学講座(1)
大　野　康　成

救急，産婦人科，小児科の医師不足が叫ばれている世の中ですが，外科医も例外ではなく，絶滅危惧種となりつつあります。そのうち，イギリスのような手術待ちの状態になるのでしょうか？心配です。

さて，なぜ外科医を選んだかについて，書いてみたいと思います。私は外科医になって15年目となります。医者になったのは，研修医制度の始まる前で，大きな研修病院に行くか，各大学医局に直接入局するかどちらかを選択する時代でした。今と違って，マッチングもなく，一部の人を除いて出身大学に残るか，地元に帰るかどちらかでした。私は，ポリクリの頃から外科系に興味があり，外科の他に脳外科，整形外科も考慮していました。ちょうどその頃，日本で生体肝移植が始まり，臓器移植で末期肝疾患の患者さんが，元気になって退院する事実を授業で知り衝撃を受けました。信州出身の私は，夏休みを利用して信州大学第１外科に見学にきました。そこで，先々代教授の幕内雅敏先生に出会い，生体肝移植も見学させてもらいました。幕内先生と出会い，先生の手術，人間性に触れ，こんな外科医になりたいと思い，信州大学に第１外科入局することを決めました。実際，外科医になってみると，手術，術後管理と大変なことも多いですが，胆道閉鎖症で黄疸・腹水があり，全身状態が悪く，肝移植をしなければ，長くは生きられない子供が，肝移植をして元気に退院して，成長していく姿を目の当たりする時の喜びはひとしおです。時には，順調にいかないときもあり，外科医の限界を感じることもありますが，そういう経験をバネに日々精進しています。臓器移植については，いろいろな意見もありますが，生体でも脳死でも人の善意が前提にあり，その気持ちを臓器移植という形でバトンタッチする手伝いをさせて頂いていると思っています。まだまだ外科医として未熟者の私ですが，少しでも患者さんの役に立てるようスキルアップしたいと思っています。

（弘前大平６年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「皮膚科学」

篠ノ井総合病院皮膚科
木　藤　健　治

皮膚科医として10年目を越えた今，この様な文章を書く機会に巡り会い，なぜ皮膚科を選んだのかということを初心に返って考えてみました。私の入局する時代は今のような研修医制度はなく，医学部を卒業後は即どこかの医局に入局するというのがほとんどでした。そのため医者の世界を知らない学生時代のうちに，自分の進路を決めなければならず，それはそれで優柔不断な私にはなかなか酷な選択でした。

私は当初皮膚科ではない科に入局しようと考えていましたが，６年生の臨床実習が終わる頃から迷い始め，結局当初考えていた科に入局することはやめました。何科に入ろうか考えているうちに卒業試験が始まり，全科の勉強をするようになり，その時初めて皮膚科の勉強をしたのを今でも鮮明に覚えています。その時の印象はなぜこんなに病名が難しいのだろうということと，visual のインパクトの強さでした。それは皮膚科医になった今でも変わっていません。そして皮膚科医になってみて思ったことがもう一つあります。それはなぜこんなにも病名が多いのだろうということです。皮膚疾患の病名は非常に多く，内科にも匹敵するといわれる程です。皮膚科医になって10年目の今でも知らない病気が山のようにあります。なぜこれほどまでに皮膚科学には病名が多いのでしょうか。それはおそらく皮膚科の病気は唯一目に見える病気だからではないでしょうか。それこそが僕がこの皮膚科を選んだ最大の理由だと思います。皮膚科は見たとこ勝負なのです。それが皮膚科の醍醐味でもあり，難しさでもあります。基本的に他の科の疾患というのは検査をいくつか行い，その結果をもとに診断していきます。皮膚科でも血液検査や真菌鏡検，皮膚生検等の検査のオプションはいくつかあるものの，基本的には見てそのまま診断になります。この簡潔さが魅力でした。この魅力を少しでも多くの人に味わってもらえたらと思っています。今後も僕自身も精進して，一目見て全てがわかるような皮膚科医になれたらと思っています。

（三重大平12年卒）